

石海小学校は、今年で146年を迎えます。我が家は、母、私、娘の三世代が卒業生。母が卒業したのが約70年前。それぞれの小学校時代の思い出を語り合い、母校石海小学校の70年を振り返ってみる事にしました。

母 岩本あき子
昭和15年度生まれ

私は、村立石海小学校1期生として入学しました。90余名が1年生となり2クラスで児童が一杯でした。学び舎は、木造建築の立派な校舎で入学出来た事を誇らしく思ったものです。

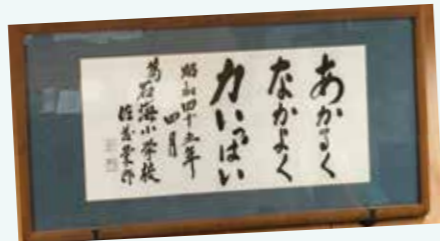
運動場の真ん中に大きなクスノキがあり校舎前には、二宮尊徳の立像がありました。授業の合図は、用務員さんがカランカランと鐘を鳴らして授業の終始を知らせて下さいました。

ある時担任の先生が、みんなの前で発表する事が苦手だった私に「思い切って手を挙げてごらん」と、励まして下さり必死で挙手しました。一度経験して褒められると発表するのが楽しくなったのを覚えています。

高学年になり音楽クラブでコーラスを楽しみ、新聞部で書く事が好きになりました。今ある80年の人生は、小学校で学んだことが礎となりました。



▲現在の学校案内と校内新聞



私 小林知子
昭和42年度生まれ

46年前、私は小学2年生。ちょうど創立100周年を迎える年で、学校挙げての記念式典や祝賀大運動会が行われた年でした。在学中に木造の講堂が鉄筋コンクリート造一部2階建の体育館へと建て替えられました。校舎も増設され、6年生のときはピカピカの新しい校舎で学ぶことができたのはとてもラッキーだったと今でも思います。

在学中の忘れられないエピソードは、1年生の時に朝顔を育てる授業で、私のだけなかなか芽が出なかったこと。毎日欠かさず水やりをして、観察をするけれど、なんの変化もない。父に話すと、日曜日の誰もいない小学校へ、二人で一緒に出かけることに。雨の中、傘をさし、父と二人並んで歩いた記憶が蘇ります。父は、私の植木鉢に、ふたばになりかけた朝顔の小さな芽を、そっと植えてくれたのです。あの日の朝顔は、今も私の心の中で咲き続けています。

娘 小林美結
平成11年度生まれ

小学生だった頃友達との間で流行し、繰り返し遊んだゲームがいくつかありました。大富豪、人生ゲーム、大縄跳び。中でも私達が特別夢中になって遊んだのが、「鬼ごっこ」です。小3~6年生の終わりまで、私たちは、

炎天下の夏の日だろうが、凍える寒さの冬の日だろうが、休み時間の度に校庭に飛び出し、チャイムギリギリまで夢中になって遊びました。それに、30分ある昼休みだけでなく、20分しかない授業と授業の間の休み時間(石海小学校では「大休み」とよんでいました。)さえも、惜しいとばかりに外に飛び出していました。大学生になった今では考えられません(笑)

それぞれの道に進んだ「鬼ごっこメンバー」とは今でも連絡を取り合い、年末年始は共に過ごし一緒に新年を迎える友となっています。

進化し続ける石海小学校

令和元年から、兵庫県教育委員会プログラミング教育スタートバック構築事業の指定校になり、令和3年1月には、児童一人一台にノートパソコンを導入。1年から6年生がプログラミング教育を実践されているそうです。母や私、娘の時代では、考えられなかった教育です。時代に即して進化する母校を今後も、母や娘と共に応援し見守ってゆきたいと思います。



太子町でいちばん古い保育園のおはなし

文・写真 松浦りつ子
前・太子高校校長



▼第1回終了式の様子

二葉保育園は、昭和8年6月に農繁期託児所(三歳以上)として、淨因寺本堂で開設されました。(筆者注:同時期に、松尾村では婦人会により乳児託児所が開設されています。この乳児託児所の取り組みは、揖保郡最初の取り組みだということが、『太子町史』に記載されています。)

一 都築陽子前園長先生にお話を伺いました

初代園長は、私の義理の祖母にあたる人です。縁あって姫路勝原区朝日谷の福正寺より太子町の淨因寺に嫁いで来られました。おそらく、婦人会から農繁期託児所の開設を頼まれて、淨因寺の本堂で子供たちを養育することになったのでしょう。当初は、初代園長先生とご主人(当時の住職・祐寛)の妹さんと二人で、子供たちの面倒を見ていたのではないかと思います。農繁期託児所なので、発足当時は田植えと稲刈りの時期に子供たちを預かっていたと思います。

一 園名の由来は

私の義父(住職・一祐)が「二葉の時期は、命あるものにとって一番たいせつな時。そのことを第一に考えて、大切に育てよう」という思いでつけました。

一 ここで、当時二葉さんに通っていた「虎屋」の廣岡稔也さんの思い出話を

私が通っていた園舎は、今と同じところに、一部屋だけの小さなものが建っていましたね。園庭には、ブランコがある程度でした。狭かったけど、子どももそんなにたくさんはいなかったで、十分でした。お寺の本堂で走り回っていましたし、蓄音機が好きでよく聴いていましたね。お遊戯会なんかは、本堂で。写真は、「花咲かじいさん」ですよ。この杵を振り上げている「悪い爺さん」の役が自分ですな。「誰もやりたがらへんから」と先生に頼まれたのを思い出しました。懐かしいですわ。

▼お遊戯会の様子



一 再び都築先生に聞きます

私は、結婚してしばらくしてから太子町に戻ってきました。それまで、保育の仕事とは無縁でした。保育園の仕事を手伝うことになって、やはり保母(現保育士)の資格は持っていたほうが良いと義母に勧められたこともあり、資格取得の勉強をしました。忙しくて大変でしたが、資格を取ったことで保育の仕事に自信が付き、二葉保育園で園長になった時も大いに助かりました。

昭和13年9月に平屋木造の園舎が完成し、昭和26年3月には「宗教法人淨因寺附設二葉保育園」として認可されました。兵庫県で最初に認可された保育園の一つです。昭和46年12月に鉄筋コンクリートの平屋園舎が竣工し、今も増設改修しながら使っています。平成26年に創立80周年を迎え、記念の大運動会を行いました。

今は長男(史典)が理事長を、次男(祐二)が園長を継いでいます。「二葉にいろいろとも園」ともども、これからも「二葉」の名前に沿った保育を続けていきたいです。



おじさんはかく語りき

文 岡本 功
社会福祉法人あすか会

「わしらの顔をよく見てみ。どこもなく品があるやろ」と、太子町のおじさんたちは自分で言います。

なぜ、おじさんたちに品があるのか、その謎に迫ってみたいと思います。品なんてものは一朝一夕に身に着くものではありません。太子町という土壌が品のあるおじさんたちを生んだに違いないと思うわけです。

歴史でも学びましたが、文明と言う

のは大河流域に起こります。太子町には林田川と大津茂川があります。この川の恵みのおかげで、太子町の土地は肥えていて農作物が良く育つ。なるほど、食べ物があるから心に余裕があり、品があるのか、と合点がきました。その事をおじさんたちに伝えると、「豊かな町やからな、太子町のもんは、ぼーっとしとうやろ」と、おっしゃる。この自虐も、やはり心の余裕から生まれてくるものなのでしょう。

川を中心に田畑が広がり、農耕が

盛んになりました。農耕には牛が利用されました。牛は、よく人を見ているそうです。おじさんたちは、父親命令で、牛を田んぼに引いていきます。ところが、牛はぐずぐずと動かない。子どものことをなめているんですね。お父さんがやってくると、さっさと歩きだす。さらに、牛は、田んぼへ向かう道中は、なかなか歩かないのに、仕事を終えた帰路はさっさと歩く。牛は学校嫌いの子どもや会社嫌いのサラリーマンと同じなんですね。



昔は林田川や大津茂川の岸に竹林がありました。斑鳩寺の境内にも竹林がありました。それらの竹林の中に秘密基地を作って遊んだそうです。稲刈り、脱穀が終わった後の藁でも秘密基地を作った。あの頃、太子町には、あちこちに秘密基地があったようです。こうして、基地づくりに勤しんだ少年たちが大人になり、あのJRの車両基地へと繋がっていったわけです。基地づくりは町づくりの基本なのかもしれません。

おじさんたちの子供の頃は、野鳥を捕まえて遊んだそうです。それって、今

はアウトヤン。しかし、おじさんたちは捕まえた野鳥を飼うわけではなく、捕まえては逃がすというキャッチ&リリースの最先端を行っていました。おじさんたちの心優しいさは、野鳥獲りで育まれたわけです。



さらに、心優しいおじさんたちは、ぬかるみにはまったバスを助けていたそうです。昔は舗装なんかされていませんからね。泥にタイヤが取られてしまう。そうすると、広場で遊んでいた子供達が、ワーツとやってきて、バスを押してあげる。子供達は、

バスを押しながら、バスの銅線を引っかく。それを売って小遣いしていたんですって。こうやって、親に小遣いをせびることなく、自分たちで稼いだ。おじさんたちの自立心はバスの銅線が育てたようです。

品のあるおじさんたちは、家の手伝いをし、よく遊びました。勉強のできる出来の良い子は、親から勉強をさせられ、太子町から出て行きました。「太子に残って、こうやって話しているのは出来が悪かったちゅうことや」と、おじさんたちは面白おかしく話されます。しかし、おじさんたちは、子供の

頃からの付き合いで、下の名前で呼び合い、たまに酒を酌み交わし、大きな声で笑う。勉強ができるより、都会に出ていくより、友達と仲良くすることこそ、大切だとおっしゃる。ここは、「和」のまち太子町です。おじさんたちは、友達の大切さを若い世代へ伝えたいとおっしゃっていました。



取材協力 川島の物知りおじさん 町与の親切なおじさん 川島の昭和男 北ノ町のまちづくりおじさん 船代の陽気なおじさんたち